

## 戈載『詞林正韻』の成立をめぐって

村越 貴代美

戈載の『詞林正韻』は道光元年（一八二一）に刊行された詞韻書で、明末から同じ目的の工具書がいくつか作られた中で、最も通行したと言われる。そのため今日まで、詞韻を論じる際に本書はしばしば言及されてきたが、その多くは、『詞林正韻』における戈載の詞韻の分類が、必ずしも宋詞（宋代）の音系を正確に記述していないという批判であり、その修正・補足であった。<sup>(1)</sup> 逆に言えば『詞林正韻』に対する興味は、宋詞（宋代）の音系をどのように記述しているかに集中した。

『詞林正韻』三巻には別に「詞林正韻發凡」一卷（以下「發凡」）が付されている。全十八条、一万余字、かなりまとまった長さを持ち、単なる凡例に止まらない。それが記された目的は、一つには『詞林正韻』の体例を明らかにすることであり、一つには詞韻とは何であるかを明らかにすることにあつたようである。「發凡」十八条は、第一条が総論、第二条から第十七条が各論、第十八条が跋の構成を持ち、各論の前半は体例に、後半は詞韻観に、論がやや傾いている。

その「發凡」第一条で、戈載は填詞を律と韻の二つの軸で捉えるべきことを提唱する。『詞林正韻』の顧千里の序には、戈載は韻を明らかにするために『詞林正韻』を作り、別に律を明らかにする書も作るつもりであったと記されており、それは「私には詞律を訂定する試みがあるが、まだ仕事を終えていない」（第十八条）という自身の言葉からも確か

められる。『墨林今話』（巻十六）は著に『訂定詞律』があると言うが、しかし律についての書はついに完成されなかったらしい（光緒二年十月、『詞律』俞樾序）。填詞の要点を律と韻の二つとしながら、律についての見解を今日見られないため、戈載の詞論を完全に把握するのは難しい。ただ両者を比較すれば、韻は一般により手軽いものと見られ、疎かにされる。そうした状況を憂えて、まず韻を正すことによって、律も正されるのではないかというのが、戈載の意図したところであった。その方法は、古には「詞韻」がなかった（ここは狭義の詞韻書を指す）という認識に基づき、古人の作品から帰納するというものである。ただし諸々の韻書を参考にしながら、実際に作品から帰納して得た結果の、詳細に過ぎるところは削り、足りないところは補うのである。以上が第一条の概要だが、戈載の記す成書の過程も、本書が先に述べたような興味を持たれてきた理由の一つであろう。

そこで小論では、「発凡」を検討し直すことによって、『詞林正韻』のもっとも基礎となる枠組すなわち分韻を中心に、戈載が作品から帰納した結果とする体例が、戈載以前の詞韻研究の成果を採用したものであることを明らかにし、あわせて『詞林正韻』が最も通行したとされる理由をも考えたい。

## 一

『詞林正韻』には巻頭に「目錄」も付されており、平上去三声を十四部、入声を五部、あわせて十九部に分類することが示されるが、「目錄」は『詞林正韻』の体例を余すところなく伝えてはいない。実際に『詞林正韻』を翻いて見ると、第一部から第十四部までの平上去三声は並列ではなく、大きく平声と仄声に分けてそれぞれ通用する韻目を示し、仄声をさらに上声と去声に分けて、韻字を収録している。また「目錄」には見えないが、部によって入声を平上去三声に作るものがあり、たとえば「入声作平声」と記して平上去各声の後に付し、韻字を収録する。第十五部から第十九部

までは「目録」の通りである。

こうした分韻が実際の作品から帰納した結果であることは、第二条で詞韻書の流れを批評を加えつつ述べた後、また第十六条で詞韻の境界を論じる際などにも、繰り返し述べられている。

平上去三声をあわせることによって、計四七の韻のグループを十九部にまとめるについては、まず入声を上去声と區別し、平声と上去声をまとめ、その上で上声と去声に分ける、という手順を踏んだらしい。

第十条に、詞は律に従って押韻し、調に従って声調を選ぶべきことを論じ、「詞の用韻は平仄両つの途であり、平韻で押韻すべきもの、また仄韻で押韻すべきものは、まことに少なくない。ここでいう仄とは入声である。……これらはいずれも入声韻を用いるべきで、これをまとめて仄とって上去を用いてはいけない」と、仄声の中でも入声を上去声と區別する。第十二条に「詞韻の分部で、必ず平で上去を領べるのは、詞に平仄互叶の体があるからである」と言うが、この仄声は上去声を指し、入声を含まない。上去声の區別は、やはり第十条に、「上去を用いる調は、通叶するとは言っても、やや區別はある」として、上声を用いなければならぬもの、去声を用いなければならぬものを列挙し、また、一つの調の中でも上声か去声か選択することがあるという。上去声については第十二条でも、音色が異なるので十分に注意すべきことをいう。

ただし入声については、入声それだけでは十分でない。第四条の冒頭で、曲韻の特徴として平上去三声が通叶し、入声が無くてもよいことが述べられ、周德清の『中原音韻』が入声を三声に作ることも言及し、「起例」の「その押韻を広くしたのは、詞を作る為に設けたからである」という言葉を引用して、「入声はつまる音であるから、これを伸ばして調を整えようとする」と必ず三声と諧っている」と言う。それは詞においても同じなのであろう、入声を収めない故に曲韻を詞韻とすることは出来ないとしながら、三声に作る入声は詞家にも例を多く見るので採用する。第四条、一連

の曲韻書の分韻は、曲においては正しいが詞にはそうでないとし、特に入声について次のように結論するのである。

況んや四声に入声を欠くも、詞には則ち明明として必ず須く入を用ゐるの調有り、断じて欠く能はず。故に曲韻は詞韻と為すべからざるなり。惟だ入声を三声に作るは、詞家も亦た多く承用す。……故に其の入を以て三声に作るの例を用ゐて、末に仍ほ入声五部を列すれば、則ち入声既に欠かずして、入を以て三声に作る者は、皆切音有り。

こうして入声五部を平上去三声と別に立てた上、入声を平上去三声に作るものを、必要に応じて平上去各声のあとに付した。

『詞林正韻』の実際の構成に沿って、「発凡」に記されているところを簡単にまとめれば、以上のようなになる。

## 二

ところが、戈載の分韻は、沈謙の『詞韻略』の分韻とほぼ一致する。<sup>(2)</sup> 沈謙の『詞韻略』については、第二条に次のようにある。

国初の沈謙曾て詞韻略一編を著し、毛先舒之が為に括略し並びに註す。東董・江講・支紙等の標目を以て、平は上去を領べるも、平上を列するに止まるは、未だ該括せざるに似たり。入声は則ち兩字を連ね、屋沃と曰ひ、覺藥と曰ふも、又た紛雜に似たり。且つ陰氏韻目を用ゐて刪併するも、既に其の当を失すれば、則ち分合の界模糊として清ならず。字も復た次を乱し、以て済むるに一類に帰せず。其の音更に明晰ならず、舛錯の譏、実に免れ難き所なり。

毛先舒が括略し註した『詞韻略』は、『韻学通指』に「沈氏詞韻略（沈謙去矜著、先舒括略併注）」（以下「沈氏詞韻略」と

して収められている。戈載の「沈氏詞韻略」に対する評価はなかなか厳しいが、いま分韻・標目に限って検討すると、「沈氏詞韻略」では「今詩韻」（戈載の言う「陰氏韻目」）、すなわち毛先舒が『韻学通指』中の「唐人韻目」で唐人韻として主張する「孫愐の『唐韻』に拠りつつ唐人の併用を詳らかにした凡そ一百七部」を用いている。いっぽう戈載は、第三条の冒頭、詞韻は詩韻とは違うものの、その源は詩韻から出て詩韻を分合したものと規定し、以下「詩韻」の流れを論じ、『切韻』『唐韻』『広韻』『韻略』『集韻』を挙げて、「名はしばしば改まったが、その書の体例は改まっていない。すべて二百六部に分け、独用同用の注もはっきりしている。ただこれを詩にのみ用いるのではなく、詞に用いても、いけないことはない」と言う。戈載が詞韻の源とする「詩韻」とは二百六韻であり、『詞林正韻』では『集韻』を採用した（第三条）。そこで「沈氏詞韻略」の韻目を『集韻』の韻目に置き換えると、なるほど前者におびただしかった半通する韻は随分と減り、分かりやすくなるが、しかし分韻そのものはほとんど重なる。ただし「沈氏詞韻略」には、平上去三声に作る入声がない。戈載の毛先舒に対する批判はむしろ、第二条では直接に語られないが、入声の扱いをめぐる見解の相違にありそうである。

戈載が入声を論じているのは第十三条で、次のようにある。

四声中、入声最も分別すること難し。中原音韻入を以て三声に作る。有るは、惟だ支微・魚虞・皆来・蕭豪・歌戈・家麻・尤侯の七部のみ。其の音は即ち部に随ひて転叶す。此れ入声にして入声に非ざるなり。四声表の入を以て分配するが若きは、則ち有無相反し、其の説も亦た微かに同じからざる有り。詞韻に就きて論ずれば、屋沃燭を以て東鍾の入声と為し、覚葉鐸を江陽の入声と為し、質術櫛を真文の入声と為し、勿迄月没曷末黠羣屑薛葉帖を寒刪の入声と為し、陌麦昔職徳を庚青の入声と為し、緝を侵尋の入声と為し、合蓋業洽狎乏を覃塩の入声と為すに如くは莫し。其の余の七部には皆無ければ、則ち至当にして易へず。前に論ずる所の穿鼻・展輔の六条と相ひ乖らず

		17	18					17	19	18	19
		質術櫛	勿迄没	月	曷末黠	羸屑薛	緝	合盍	葉帖	業洽狎乏	
	12	6		7		9	10		13	14	
交豪	尤侯幽	真諄臻	文欣魂痕	元	寒桓刪	山先仙	歌戈	佳半 麻	侵	覃談	塩沾敵威衙凡
唇		抵 齶				直 喉		閉 口			
肴豪	尤	真 文 元半	元半 寒 刪 先			歌	佳半 麻	侵	覃 塩	威	
篠	尤有	真軫		元阮		歌哿	佳馬	侵寢	覃感		
覺藥	屋					曷	陌職 黠	緝	合 葉	洽	
覺藥	屋沃					物月	質陌 物月	質陌	合洽	物月	合洽

して、相配するに適ふ矣。之を高安の七部に入声有ると合すれば、入声は是に于て全きならざらん乎。

前に論じた穿鼻・展輔の六条とは韻尾による分類であり、<sup>(3)</sup> 戈載は第十六条で、「詞韻は詩韻に比べると寛いとはいっても、各々境はある。前に論じた六条が、それである」と、詞韻十九部を理論的により統合するものとして利用している。この六条は劉永濟氏が『詞論』（上海古籍出版社、一九八一年三月）卷上通論、声韻第四で指摘することく、『韻学通指』中の「声音韻統論」を援用したものであり、戈載の言う四声表が同じく『韻学通指』中の「唐人韻四声表」を指すこと、従って四声表とは六条に基づいた四声の配当であることは、「声音韻統論」によって分かる。いま戈載の第九条によって、六条を示す。

韻に四呼・七音・三十一等有り。呼は開合を分ち、音は宮商を弁じ、等は清濁を叙す。而して其の要には則ち六条有り。一に曰く穿鼻、二に曰く展輔、三に曰く斂唇、四に曰く抵齶、五に曰く直喉、六に曰く閉口。穿鼻の韻は、東冬鍾・江陽唐・庚耕清青蒸登の三部、是れなり。其の字は必ず喉間従り反りて穿鼻に入り、出でて収韻を作る。之を穿鼻と謂ふ。展輔の韻は、支脂之微齊灰・佳半皆咍の二部、是れなり。其の字は口を出ての後、必ず両輔を展き、笑ふが如き状にて収韻

戈載	入声	部	15	16	17				
	韻目		屋沃燭	覺藥鐸	陌麥昔	職			
載	平声	部	1	2	11	3	5	4	8
	韻目		東冬鍾	江陽唐	庚耕清青蒸登	支脂之微 齊 灰	佳半 皆 哈	魚虞模	蕭宵
六条分類			穿 鼻			展 輔			斂
毛先舒	平声	韻目	東冬	江陽	庚青蒸	支微齊灰半	佳半 灰半	魚虞	蕭
		標目	東董	江講	庚梗	支紙	街蟹	魚語	蕭
	入声	韻目				陌質職物	月屑錫	月職	陌職
	標目				質陌	質陌物	質陌	質陌物	質陌物
								藥	沃
								覺藥	屋沃

を作る。之を展輔と謂ふ。斂唇の韻は、魚虞模・蕭宵爻豪・尤侯幽の三部、是れなり。其の字は口に在りて、半ば啓き半ば閉ぢ、其の唇を斂めて、以て収韻を作る。之を斂唇と謂ふ。抵齶の韻は、真諄臻文欣魂痕・元寒桓刪山先仙の二部、是れなり。其の字は將に終らんとするの際、舌を以て上齶に抵著し、収韻を作る。之を抵齶と謂ふ。直喉の韻は、歌戈・佳半麻の二部、是れなり。其の字は直だ本音を出して、以て収韻を作るのみ。之を直喉と謂ふ。閉口の韻は、侵・覃談塩沾嚴咸銜凡の二部、是れなり。其の字は其の口を閉ぢ、以て収韻を作る。之を閉口と謂ふ。凡そ平声十四部、已に此に尽きたり。上去は即ち之に随ふ。惟だ入声の異なる有る耳。入声の本体は、後に四声表を論ずる在る有り、亦た類推すべし。其の三声に叶ふ者に至りては、則ち某部に入れば、即ち某音に従ふ。総べて此の六条に外ならず。

平上去三声を六条のいずれに分類するかは、戈載が直喉とした第十部佳半を毛先舒が展輔とするほか、両者に違いはない。異なるのは入声であり、第十三条に言うごとく、「唐人韻四声表」の分配を戈載は取らないのである(表参照)。

先に『詞林正韻』には「部によって入声を平上去三声に作るものがある」と述べておいたが、それらはいずれも入声を配当しない部であり、第

十三条の引用した部分の最後に言うように、『中原音韻』（及びその他の北曲韻書）にならった平上去三声に作る入声が付される部と、戈載の詞韻での入声を配当する部とは、互いに補い合う関係になっている。

いっぽう『韻学通指』で見える限り、毛先舒は平上去三声に作る入声を考えない。戈載は第十三条で、先の引用部に続いて次のように言う。「その他の韻書で入声を論じているものも、説は一つではない。顧炎武に『古音表』が有り、柴紹炳に『古韻通略』が有り、江永に『古韻標準』が有り、分配はそれぞれ異なり、各々当否もあり、いずれも詞に施すものではない。ただ毛先舒の撰した曲韻は、詞と合うものがあるようだ。一屋単用、二質七陌八緝通用、五屑十葉通用、また単用も可。これは南曲のために設けられたもので、南曲は詞に本づいているので、宋詞における用韻は、まことに流れを殊にするものの源は同じである。三曷六藥通用、四轄九合通用となると、これも詞とは合わない」と。続く第十四条に韻目は「『洪武正韻』に本づいている」とあるのから判断すると、この毛先舒の撰した曲韻とは、『韻学通指』中の「南曲正韻略」である。第十四条は「南曲正韻略」の詞における当否をさらに具体的に述べる条だが、その中で「漁洋山人がかつてこの書を論じ、宋詞と暗合して、填詞家の援拠とすべきものだ、と言ったが、その通りである」と言う。戈載が毛先舒を使う背景には、王士禛の影響があるのかも知れないが、それはともかく、毛先舒の「南曲正韻略」に対する未練はなかなかである。だが結局、その梓組は毛先舒に従わずに、すべての平上去三声が何らかの形で入声と通押できるように配当し直した。それは何故か。その理由を、両者の生きた時代から探ってみよう。

### 三

戈載、字は順卿、呉興の人。乾隆五年（一七八六）の生まれ（朱綬『知止堂文集』）、卒年は不詳。「発凡」第十八条によれば、音韻の学は幼きより庭訓を授けられ、父宙襄（一七六五—一八二七）と錢大昕（一七二八—一八〇四）が研究・議



論すること長々と厭きないことを見、末席で時に話の端をうかがっていた。父の著に音韻に関する諸書があり、謹んで校録して、韻学の源流・升降・異同・得失はいささか門徑をのぞいた。後にまた顧千里（一七六六—一八三五<sup>5</sup>）の会合に参加し、きちんとした教示は受けなかったが、ようやく少しずつその大略を習得することが出来た、という。

戈載は乾隆五七年に錢大昕の為に「通鑑注辯正序」を書いたが、そこで錢氏を自らの師としている。<sup>6</sup> しばらく道光七年に戈載が没した際、彼の為に「清故孝子戈君之銘」を作ったのが顧千里であり、『思適齋集』卷十八、嘉慶二年（顧千里三三歳）の「半樹齋文集序」（同卷十二）や「題戈小蓮紅袖添香夜讀書卷子廿六韻」（同卷二）も残っている。戈載にとっては、父に年齢も近い顧千里の方がより親しい存在だったらしく、「発凡」では錢大昕を錢竹汀先生、顧千里を顧丈澗蘋と呼ぶ。

戈載と顧千里の交遊は、嘉慶十四年秋（戈載二四歳、顧千里四四歳）の「月下笛 過袁綬階旧居有感同戈順卿賦」（同卷四）がその早い時期のものとして知られ、のち道光元年に「詞林正韻序」を、二年に「吳中七家詞序」を、<sup>7</sup> 六年に「戈順卿填詞函序」を、それぞれ戈載の為に作った（同卷十三）。顧千里は戈載のほか、道光六年に「嚴小秋詞序」を嚴小秋のために、道光九年に「詞学叢書序」を秦恩復のために作った（同卷十三）が、これら詞書の序はいずれも顧千里が五十歳を過ぎてから、その七十年にわたる生涯の晩年に近い作である。それらを『思適齋集』に収めるにあたって執筆順ではなく、秦恩復、嚴小秋、戈載と並べたのは、やはり当代屈指の蔵書家である秦恩復に敬意を払ったのであろうか。顧千里が秦恩復と知り合ったのは嘉慶十年（一八〇五）三月、その石研齋を訪れて秘笈を觀、為に「石研齋書目序」を作った（同卷十二）が、その頃はまだ黃丕烈の仕事が多くしていた時期で、いよいよ秦恩復の仕事をするようになったのは嘉慶二二年以降、すなわち詞書の序を書き始めた頃からである（『顧千里年譜』）。

『詞林正韻』の体例に顧千里の影響が直接に見られるのは、韻目・字次・字音について、『広韻』を退けて『集韻』

を採用した点である。『集韻』の方が後に成立して字を最も広く取っているため（「発凡」第三条）というのだが、『詞林正韻』に収録したのは結局『集韻』の十分の二（一本では十分の三）に過ぎない（第十七条）。また一条を割いて述べる韻目についても、標目や順序の違いは、詞韻の分部に影響しない、同用・独用は、詞韻と合わないいくつかは改めるが、一般に詞韻の方が通用する韻は広い、という理由ですべて『集韻』に従った（第六条）のであり、特に『広韻』を退ける理由は見当たらない。結局のところ、全作業に三年を要した（第一条）、従って嘉慶二三年ころから着手された『詞林正韻』編纂の数年前、嘉慶十九年十二月に、顧千里が「通政の曹寅の刊した朱氏伝鈔本が次第に傷み磨滅したので、重ねて補完してもとの姿に戻し<sup>(8)</sup>」、いよいよ抛り所とできるようになったため（第三条）、というのが『集韻』採用の主たる理由だったであろう。

だが毛先舒の詞韻論との相違を考える時、その影響は右に述べた点に止まらない。

毛先舒（一六二〇〜一六八八）が『韻学通指』を著したのは、その書名、また筆頭の論文「声音韻統論」に、「韻の理は精微にして法は煩苛であり、また古今の詩騷詞曲の体制も同じでないため、損益が生じ、時代を追って変化もし、明らかに示そうとしても、いよいよ眩惑を増すので、今しばらく唐人の詩韻を基準として六条にまとめるとあるのから窺えば、古今・形式の違いを超えた統一的な韻学史を計画したためである。ただし彼の本分は唐韻であり曲韻であって、詞韻ではなかった。自序によれば、順治五年（一六四八）、先舒二八歳の時に『唐人韻四声表』『南曲正韻』を撰したが、同郡の柴紹炳の『古韻通』、沈謙の『詞韻』、錢肅起の『中原十九韻説』が精密で辞家の宗法となるもので、それに自らの著もいささかは徴するところ有るであろうから敢えて併せたいが、すべてで百十余紙、食にもこと欠く貧しさでは流布させるのが難しい、そこで先ず概略を世に問おう、としたのである。さらに問答形式の論文などを書き加えて『韻学通指』は成ったが、それがその後どのように発展したかは、今はおく。ここでは戈載が沈謙の『詞韻』と言わずに『詞

韻略』と言ったこと、柴紹炳の『古韻通』と言わずに『古韻通略』と言ったことを、もう一度思い出せばよいだろう。

『韻学通指』は、『四庫全書総目提要』經部小学類存目で、毛先舒が基準とした孫愐の『唐韻』は『広韻』の首に序を、徐鉉校正の『説文』に反切を残すのみである、など、何点かに互って批判を加えられるが、ここで注目したいのは、入声の処理に対する批判である。提要の筆者は、「上下平声五十七部のうち、入声の有るのは三十四、入声の無いのは二十三。唐以来、異説は全くなかった。明の葉秉敬が『韻表』を作るに至って、始めて後世の方音で割裂分配し、部ごとに入声が有るようにした。先舒はその説にならって、若干増減し、標して唐人韻入声表とした。考察が詳らかでない上、古人に依託してもいる」と言う。「唐人韻入声表」は「唐人韻四声表」のことであろう。それにも先行する説があったことはまた別の関心と呼ぶが、ここで顧炎武が古音の入声を母音韻尾（戴震の用語に従えば陰）の類に帰属させたことが想起される。伝統的な四声相配では、『韻鏡』など韻図に明らかかなように、入声を鼻音韻尾（同様に陽）の類に配当していたが、顧炎武は『音論』の「近代入声之誤」で異説を提出したのであった。そして顧説はのち修正されて、やはり入声は古音においても陽に配当すべきだと考えられるようになったのである。

顧炎武（一六一三—一六八二）は毛先舒より七歳ほど年長で、『韻学通指』にも目を通していたことは、後に書かれた『韻白』中の「記顧寧人説韻五条」によってわかる。例えば第一条、『韻学通指』の「声韻叢説」で論じた『詩経』の押韻について顧炎武から反論のあったのを、未だ決定できぬとして記録している。また『撰書』巻六に収められた「答顧寧人論併韻書」では、顧炎武が唐韻百十四部、宋韻百七部で、現行の韻書は宋韻であると考えた（毛先舒の解釈による）のを、杜甫の詩を例に、百七部が唐韻でないとすることは出来ないと反対している。その議論もさることながら、冒頭に「救文格論および日知・考古二録を承り」とあり、顧炎武が「五十歳以後、経と史の研究に一心になり、音韻の学問について深く会得するところがあった。いま『音学五書』を著して『詩経』以来長く絶えていた伝統を受け継ぎ、別に

『日知録』三十余巻を書いた」(与人書二十五)という、音韻の学を集大成した頃にも交遊は続いたらしい。

いま顧炎武・毛先舒両者の音韻の学における影響を論じる用意はない。ここで問題としたいのは、戈載が毛先舒の「声音韻統論」「唐人韻四声表」をバックボーンとしながら、入声の配当だけは説を異にした、そこに顧千里に授けられた音韻の学の成果が現れているのではないか、ということである。顧炎武の古音十部説が段玉裁(一七三五―一八一五)の十七部説へと発展していく過程で、入声の配当が陰から陽へと修正された、その古音解釈の成果を戈載は取り入れることができた。のちに確執を生じたとはいえ、乾隆五七年(一七九二、段玉裁五八歳、顧千里二七歳)に初めて出会い、段玉裁は顧千里を激賞して「音均表を理解する人は、昔は高郵の王懷祖、今は貴方だ」と言い、顧千里は袁廷檣・黄丕烈に語って「私の学問は茂堂先生から得た」と言ったという(劉盼遂『段玉裁先生年譜』二人であり、また父戈宙裏も段玉裁と交遊があった(同、乾隆五九年六月)のだから。それは当然、毛先舒が入声を陰に配当していることへの疑問になったであろう。

こうして入声を陽に配当することによって、戈載は『詞林正韻』編纂の上で、平上去三声に作る入声を陰に配当するという、「沈氏詞韻略」にはないふくらみを持たせることができたわけだが、ここには、晩年の顧千里が詞に多少なりとも関わりを持っていたこと、また秦恩復といくつかの仕事を共にしていたことの影響もあるのではないか。「発凡」では『中原音韻』他の北曲韻書を参照したとされているが、『詞林韻積』の体例も大いに参考になったと思われる。『詞林韻積』について、「発凡」第二条に次のように言う。「近ごろ秦敦夫先生が阮芸台先生家蔵の詞林韻積、一名詞林要韻を取り上げて、重ねて開雕した。題して宋棗斐軒刊本という。だが跋中に元明の時期の謬託ではないかと疑い、またこの書は専ら北曲のために設けられたのではないかと疑う。誠にその通りである。十九韻に分けて入声がないのを見れば、曲韻と断じて間違いない」と。『詞林韻積』が曲韻書として批判されるのは、「沈氏詞韻略」とちょうど逆に、平上

去三声に作る入声のみで、入声そのものがないからであるが、それを陰に配当するという点で、『詞林韻積』と『詞林正韻』は一致する。厲鶚の「論詞絶句」によって長く詞韻書と考えられていた『詞林韻積』を詞韻書に非ずと正したが、他ならぬ秦恩復であったということは、戈載にとって意味があったと思うのである。ちなみに秦恩復は『詞学叢書』に張炎『詞源』を収めるにあたって、戈載校本によって校訂している。

#### 四

このように戈載の『詞林正韻』は、入声を陽の類に、平上去三声に作る入声を陰の類に配当することによって、理論的に詩韻と曲韻とを矛盾なく繋ぐことになった上、実際に填詞を作る際にどの平上去三声も例外なく入声と通押し得るようにもした。それによって清朝の文学者たちが填詞を作る上での可能性は、一段と広がったであろう。小論では触れる余裕がなかったが、『広韻』『集韻』やまた『詞林韻積』にもあった意味の注を、いったいに収めない、方言音や滅多に使わない難字は基本的には収めないが、詞でよく使う場合は収める、煩を避けて字の収録を限定する、など、利用に際しての便宜をかなり意図的に図っている。こうした理論的な整然さに加えて、実用性を兼ね備えているということが、『詞林正韻』を通行させた理由だったのではないか。

#### おわりに

以上、『詞林正韻』を「発凡」から検討してきたが、もとより実際の宋词の作品から帰納した結果が最も一次的な資料となり、それとの比較において『詞林正韻』を検討すること、すなわち小論の冒頭に述べたような、これまでに試みられた綿密な作業が重要であることは、疑いない。戈載は毛晋の『宋六名家詞』をもとにしたながら、八家詞（一本では

七家詞)や六十家詞を選んでおり(第十八条)、それらが戈載の詞韻帰納の材料として考えられる。ただ、戈載が完成を見ずにいた律の検討が未だ必ずしも十分とはいえない、また宋词のテキスト間の異同も少なくない、という現状において、戈載の詞韻論の背景に毛先舒・沈謙の影響があることが明らかになった以上、いわゆる常州派との関係で帰納の対象とする詞人・時代・地域を限定することもできるのではないかと思われる。

注

(1) たとえば、詞人の出身地ごとに分類を試みた魯国堯氏の「宋代辛棄疾等山東詞人用韻考」(『南京大學學報(哲學社會科學)』、一九七九年第二期)ほかの一連の仕事や、特定の詞人について考察した葉詠琿氏の『清真詞韻考』(文史哲出版社、一九七二年八月)、入声に限定して調査した金周生氏の『宋詞音系入声韻部考』(文史哲出版社、一九八五年四月)などがある。また王熙元・陳滿銘・陳弘治合編の『詞林韻藻』(台灣學生書局、一九七八年四月初版、一九八一年十月再版)は、『詞林正韻』の韻字の収録順に(ただし、すべてではない)、唐・五代・宋の詞から例句を集めたもの(詳しくは同書の「例言」参照)で、戈載の収録した韻字に例句が見つからない場合もあり、興味深い資料である。

(2) 『詞林正韻』が『詞韻略』の影響を受けていることは、すでに指摘がある。趙誠氏は『中国古代韻書』(中華書局、一九七九年十月)第八章「詞曲韻書」第一節「詞韻專書」において、清代に大量に出現した詞韻書を、次の三つに分類した。

- ① 傅燮調『詞韻』、沈謙『詞韻略』、謝元淮『碎金詞韻』、吳綺『詞韻簡』、仲恒『詞韻』、戈載『詞林正韻』等。
- ② 吳焜ら合編『學宋齋詞韻』、鄭春波『綠漪亭詞韻』、葉申薌『天籟軒詞韻』等。
- ③ 樸隱子『詩詞通韻』、李漁『笠翁詞韻』、許昂霄『詞韻考略』等。

第一の派について、沈謙の『詞韻略』が伝統的な詩韻の韻目を用いて韻部の分合を説明していたのを、戈載が『広韻』の韻目を用いたとし、派と派の境界を突破して論じるならば、それは『學宋齋詞韻』を継承したものだ、と言う。ただし、趙誠氏の言うような『広韻』の韻目を用いた『詞林正韻』を、まだ見ない。そうした版本の所在を筆者に書簡で問い合わせたことがある

が、まだ返答をいただいていない。また、趙誠氏は巻末に「主要詞韻韻目比較表」も付しており、沈謙『詞韻略』、戈載『詞林正韻』、『学宋齋詞韻』、『笠翁詞韻』の四書が一覧され、各派の分韻の様子が分かる。そこで趙誠氏の引用する『詞韻略』と『沈氏詞韻略』には異同があり、『詞林正韻』の分韻は後者によりよく一致する。なお『詞苑叢談』に引かれている「沈氏詞韻略」の韻目も、やや異同がある。「沈氏詞韻略」の毛先舒の注に、平声は独押し上去声は通押するので、部ごとに平上去三声をまとめながらも平仄に分け、入声は平上去三声と通押しないので、別に部を立てる、とあるのは戈載も意見を同じくするであろうし、「沈氏詞韻略」の注の最後にある「唯だ名手の雅篇を以て、灼然として弊無き者は準と為す」や、『倚声集』に見える「讒才の劣手、譜を按ずるを苦しみ、更らに其の疎漏を利して、借りて以て自ら文る」など、毛先舒の言葉を「発凡」第一条で踏まえていることなどから、戈載が直接にはなく、毛先舒の『韻略通指』を介して沈謙の説を援用していると考えてよいと思う。

(3) 表は戈載の第九条・第十三条の記載に沿って作成したので、毛先舒の入声の配当が分かりにくくなっている。劉氏の『詞論』にも「唐人韻四声表」が付されているので、参照されたい。特に展輔だが、「唐人韻四声表」には去声を「承る」入声があり、なお検討が必要だが、ここでは平声で代表させた。一つのモデルとして見ていただきたい。

(4) 羅常培氏は『漢語音韻學導論』(太平書局、一九七〇年三月、一九七七年四月重版)第三講「韻類之分類」3・8「釈曲韻之六部」で戈載の六条を取り上げ、直喉は開口無尾、穿鼻は「ㄟ」、展輔は「ㄟ」、斂唇は「ㄟ」、抵齶は「ㄟ」、閉口は「ㄟ」を尾音とするとした。ただし羅氏は授の概念から六条を分析するので、戈載の分類とは合わない点もある。なお、詞家が六条を論じることが、戴震の「答段若膺論韻」(『声類表』巻首)にも見え、戈載の頃にはすでに一般的な論であったのかも知れない。

(5) 『歴代人物年里碑伝綜表』『中国歴史人物生卒年表』など、一七七〇〜一八三九とするものがあるが、汪宗衍『清顧千里先生広圻年譜』(広文最局、一九七一年十一月)に依る。以下、顧千里の事跡は主に同年譜に従う。

(6) 錢大昕も戈宙襄のために「半樹齋文稿序」(『潜研堂文集』巻二六所収)を書いている。

(7) 吳中七家とは、戈載ほか沈彦曾・朱綬・陳彬華・吳嘉淦・沈伝桂・王嘉祿の七人である。

(8) 『集韻』補完の経緯は顧千里の原書の序より抜粋したものである。顧千里の原文によれば、朱彝尊が毛扆の家より伝鈔本を

得、康熙丙戌（一七〇六）に曹寅に嘱して刊行してより、同時に刊した『広韻』ともども世に並行したが、『集韻』は他に刻したものがなく、学者は江寧樞使署に存する版を幾度も重ね、百余年の間に次第に磨滅してきたので、すみやかに補完しなければならなかった、というのであり、『広韻』『集韻』のいずれかがより優れているとの判断が、顧千里にもあるわけではない。

〔付記〕

孫殿起『販書偶記』（中華書局、一九五九年八月）に、『詞林正韻』三卷『発凡』一卷の版本三種、①道光元年翠薇花館刊本、②同治四年（一八六五）番禺姚氏重刊本、③光緒壬辰（一八九二）王氏四印齋刊本、が記録されている。筆者は②未見。①は影印本（上海古籍出版社、一九八一年十月、吳鼎藩氏藏本）があり、本稿の底本とした。ほかに④光緒三年（一八七七）『嘯園叢書』所収刊本がある。

④は葛元煦の識語によれば、「原刊」が乱を経て失われたので、「原本」を探して復刻したもの。③は光緒辛巳（一八八一）の許廣颺の序、並びに王鵬運の跋によれば、「旧刻」が兵に焼かれたので許廣颺から抄本を借りて付葉したもの。①の影印本と対校した結果、④の方が③より誤りは少ないが、いずれもやや粗雑な感を免れない。

①の翠薇花館とは、戈載の書室。影印本の表紙に「翠薇花館藏版」、巻末に「閩門外桐涇橋西石屑巷口吳学圃刊刻」とある。

『墨林今話』巻十六によれば、戈載は初め楓江に住み、のち山塘の白馬橋に移った。山塘は蘇州の街の西側を流れる河。街の北側には上塘河が流れている。二つの河が交わる辺りに渡僧橋があり、閩門はそれよりやや南、山塘河沿いにある。一九八四年三月に筆者が蘇州を旅行した時、白馬橋は見つからなかったが、土地では同じ発音の白姆橋が、楓橋の近くにあった。楓橋は街の外側、上塘河のほとりにある。白居易が馬を繫いだことに由来する白馬橋は、兵乱で焼き払われて、今はないという。『蘇州史話』（廖志豪ほか、江蘇人民出版社、一九八〇年十二月）によれば、一八六〇年五月二四日から三日間、山塘街・渡僧橋から南濠街・胥門一帯は、太平軍の放った火によって焼きつくされたというが、これが識語や序跋にいう兵乱であろうか。

なお、『販書偶記』には何種か詞韻書が記録されているが、『詞林正韻』のように重ねて刊行されたものはない。この点からも、本書が重用されたことが窺知できよう。